建置沿革

ズ、

〔華夷通商考下〕大寃（タイワン）○略中

島國也、此所古ハ主ナキ島ナリシニ、何ノ時ヨリカ、阿蘭陀人日本ヘ渡海ノ便リニ、此島ヲ押領シテ、城廓ヲ構ヘ住シテ、日本其外國々ヘ此所ヨリ渡海セシヲ、日本寛文元年ノ比、國姓爺厦門ヨリ此島ヲ責落シ、ヲランダ人ヲ追拂、國中ヲ治メ、城廓ヲ改メ築キ居住セリ、其子ノ錦舍モ、父ノ遺跡ヲ續ギ、一國ヲ治テ、明朝ノ代再興センコトヲ謀テ、終ニ清朝ニ隨ザリシニ、其子奏舍、日本貞享元年ニ至リテ、清朝ニ降參シテ、國ヲ退キ渡シテ、其身ハ王號ヲ蒙リ、北京ニ居住ス、今此島モ清朝ヨリ守護ヲ置テ仕置スル也、

〔琉球國事略〕異朝の書に見えし琉球國の事

同（○明萬曆）四十四年五月、尙寧其通事蔡廛をして、日本の戰艦五百餘、雞籠、淡水を脅し取りて、閩廣を犯さんとする事を奏す、

元和二年の事也、日本の戰艦雞籠、淡水を攻取りしといふ事心得られず、鷄籠は一ッには東蕃といふ、今の大清の諸羅縣の北にあり、すなはちこれ臺灣の地なり、淡水洋は呂宋の地に近し、按ずるに、大明萬曆年中に、泉州の人鄭芝龍といふもの、本朝に來りて肥前國松浦郡平戸にとどまり、其後に長崎にうつり住す、平戸老一官といひしはこれなり、つひに我國をさりて、海盜のために推されて、賊首となり、熹宗天啓六年十二月、閩中に入て漳浦の白鎭に據る、これ本朝寛永三年の事也、懷宗崇禎元年九月に、大明に降て終に福建の海防使となさる、これ本朝寛永五年の事なり、初め芝龍我國を去り、塔伽沙古にゆき、居る事一年にして、船よそひして安海にゆくといふ、おもふに日本戰艦雞籠、淡水を脅取といふ事は、鄭芝龍が事をいふ歟、又按ずるに、芝龍大明に降て、海盜を平らげし功によりて、後に太子大師に拜せらる、其子鄭成功は、肥前國